

特集 企業内診断士・孤軍奮闘記 4

## 第4章

# IT企業で「貢献」をモットーに コーディネーターとして活躍

——株式会社アイエンター 岸本 慎介さん



伊原 知希

東京都中小企業診断士協会城東支部

「四季」をコンセプトにした遊び心あふれるデザインの会議室。スマートスピーカーを設置した受付。すてきな空間で来訪者を迎える株式会社アイエンターは、高い技術力を駆使したシステム開発を武器に成長を続けるITの総合コンサルティング会社である。

社員の平均年齢が30歳代前半と若く、2004年の設立から着実に顧客を増やしている。同社で管理本部の総務グループに所属し活躍している岸本慎介さんにお話を伺った。



受付にはスマートスピーカーがある

## 1. 業務活用のために診断士資格を取得

### (1) 総務グループでの多岐にわたる業務

岸本さんの現在の業務は多岐にわたる。

1つ目は、法務担当の役割。営業部門から受領した契約書を顧問弁護士にチェックしてもらう。弁護士と営業を仲介しスムーズに契

約書を完成させる。契約関連の仕事をしていると社内の動きがよくわかり、会社の成長を実感できるという。

2つ目は、社内SEの役割。過去にシステム開発部門に在籍した経験を生かし、Excelマクロの作成などで業務効率化を行う。総務グループには開発経験のない社員が多いため、メールにファイルを自動で添付するマクロを作成するだけでも喜んでもらえる。また、新支店設立時には業者とともにネットワーク設定やPCのキitting作業も行う。最近では札幌や沖縄支店と本社を結ぶネットワーク設定を行った。

3つ目は、労務担当の役割。働き方改革に伴う制度対応、たとえば社員の有給休暇取得状況のチェックなどを行う。グループウェアのアンケート機能を使用し社員とコミュニケーションを取る。社員は毎年20名ほど増えているため、管理業務も増加。また、社会保険労務士と連携しながら社内環境の整備も担っている。

4つ目は、経営企画の役割。人材開発支援助成金など、補助金の申請書類作成を行う。どれも中小企業診断士の仕事に近い業務である。2018年には経営革新計画を作成し、計画以上の利益を達成して、優秀賞にノミネートされている。

このように他部門担当の人事を除き、一般的な間接部門の業務を幅広く担当している。



AIエンターの岸本さん

## (2) 業務のために診断士資格取得を目指す

岸本さんが同社に入社したのは2011年。入社時はスマートフォンアプリの開発を希望していたが、それまでの経験から企業向けシステム開発部門に配属となった。主な担当業務は、客先に常駐し設計やプログラミング作業を行うことだった。

ある営業支援システム開発の案件では、顧客が大手企業ということもあり、何か行動をするにも承認をもらわなければならないことが多く、裁量を持って自由に仕事をしたい岸本さんの思いと相反するところがあった。そのような状況でも、謙虚で物腰柔らかな姿勢や、大学時代から学んでいた情報系の技術力を生かし、案件を着実に遂行していた。

診断士資格取得のきっかけとなったのは、ある中小企業向けシステム開発案件だった。同社は営業支援システムの代理店を新規に始めることを計画していたため、中小企業の経営者と話すことが多くなると考え、資格の勉強を始めたのだ。岸本さんは2013年に一発合格。

残念ながら案件自体は白紙となってしまったが、それまで興味があったマーケティングも含めた知識を体系的に獲得することができ、システム開発技術だけでなくビジネス面も含めた幅広い視点を身につけた。

## (3) 診断士知識を業務に活用

診断士資格が役に立ったと感じたのは、人事系パッケージ開発の案件に携わったときだ

った。これまでは顧客から言われたとおりにシステムを設計し、プログラミング作業をすることが多かった。「診断士資格取得後はなぜこのシステムを開発するのかを考え、設計時に顧客にとって必要なものがほかにないかを検討し、顧客に提案ができるようになりました。これまでよりも幅広い視点で設計業務に携わることができました」と振り返る。

一方で、システム開発業務では診断士資格を活用できるシーンは限定的であった。そこで上司に営業への同行など、これまでの開発業務以外の仕事ができないか相談した。しかし、上司からは「診断士資格はあくまで机上の知識であり、現場で求められるものとは違う」と言われ、これまでどおりシステム開発の業務に従事していた。

## 2. 全員女性の総務グループへ異動

### (1) 突然の異動

2017年、常駐先で仕事をしていると突然、入江恭広社長から本社に呼び出された。そこで管理部門の総務グループへの異動を言い渡された。

「私の会社では希望を出さずに異動することはあまりないため、うれしさよりも驚きが大きかったです。入江社長は私が診断士資格を取得していたことを知っていました。尊敬する社長の判断に任せようと思いました」

異動先の総務グループのメンバーは岸本さんを除いて全員が女性で、子どももいて時短勤務。そのため急ぎの仕事は岸本さんが引き受けることが多い。開発部門ではそのような経験がなく最初は戸惑った。

しかし、社内でもまずは岸本さんに頼んでみようと思われるほど信頼されるようになり、間接部門だからこそ社員の役に立ちたいと考え、責任感を持つようになった。

そして、時短勤務の社員と協力し、チームのタスクを分担しつつ、診断士資格を持つ岸本さんにしかできない補助金申請の業務に集中するようにしている。

(2) オフィスの増床に尽力

総務グループに異動して最も印象に残っている仕事はオフィスの増床である。これまではビルの5階から上を借りていたが、事業拡大に伴い3階と4階も借りることになった。増床に伴うネットワークの設定やPCの設置、机や椅子の発注も行った。その過程で設備業者や不動産会社等、多くの関係者とやり取りを行うことに苦心した。

また、入江社長が全国を飛び回っているため、承認印をもらう日程調整にも苦労した。一方で契約書関連の仕事等、普段の業務もあるため忙しい状況が続いた。そのような状況でも、多くの関係者を巻き込みながら当初の予定どおりにオフィスの増床を成功させた。

成功要因の1つが中小企業診断士としての幅広い知識だった。

「中小企業診断士の価値の1つとして、さまざまな関係者と話すときにその人の言葉がわかるということがあります。たとえわからなかったとしても勉強の時間だと思って積極的に学ぶようにしています」

物事を整理し、今やるべきことを明確にすることで、時短で働くほかの社員と協力し、期限に間に合わせる推進力も欠かせなかっただろう。これまでのシステム開発経験と、中小企業診断士の価値、岸本さんの人柄の総合力を発揮できたからこそ成果を出すことができたと思われる。

(3) 「向上委員会」での活動

同社には「アイエンター向上委員会」という有志の委員会が存在する。主に若手社員が中心となり社内環境の整備や会社の雰囲気づくりを担っている。

岸本さんは開発部門在籍時から委員会に参加している。委員会で行っているものと総務グループで行っているものには重なるものが多いため、非効率にならないよう調整している。また、「自分は委員会の中でベテランに属するので若手が話しにくくならないよう発言量を調整している」という。

具体的な活動としては、熱中症対策として塩飴やラムネを会社で用意する、自動販売機にスポーツドリンクを増やすなどを行っている。社員の意見をこまめに吸い上げ、それを着実に実行に移すことで組織活性化を図っている。また、自分では解決できないことがあれば経営層への進言も行っており、現場と経営層の架け橋のような存在も担っている。

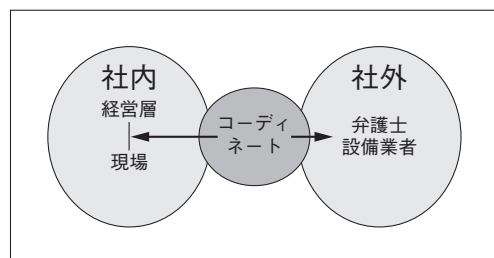
岸本さんは、東京都中小企業診断士協会城西支部の「活性化委員会」にも所属している。同委員会は、支部に所属する中小企業診断士のモチベーションを上げるため積極的にイベントなどを実施する。また、企業内診断士向けに補助金申請のセミナーを講師として開催している。企業内でも診断士の価値を発揮できる機会はたくさんあることを伝えるためである。

「企業内で中小企業診断士としての活動ができていない人でも、もっとできることがあるということ伝えてたい。本業に還元できるチャンスは思っている以上にあります」

本業でも診断士協会でも組織活性化の活動を行い、そこで得たノウハウを本業と診断士活動の両方に活用している。

このように岸本さんは総務グループの担当者として、社内外を問わずさまざまな関係者と調整を行い、組織をより良くするための活動を行う、同社に欠かせないコーディネーターとしての役割を担っているのだ。

図表 社内外をコーディネート



世界一楽しい会社へ

### 3. 「貢献」をモットーに楽しむ

同社の全社員は本社ビル受付近くの壁に各自の目標を手書きしている。人それぞれの目標で面白く、どんな人なのかと見る人の関心を引く。岸本さんの仕事をするうえで大事にしたい目標となる言葉は「貢献」である。

「自分が何かをやって周りの成果につながったときに貢献できたと感じます。総務グループは間接部門で、社員がお客様。社員に喜んでもらえて、その結果として会社の成長につながればと思い仕事をしています。もっと会社が大きくなるのを見ていきたい。」

また、尊敬する入江社長のためにも頑張りたい。社長はカリスマで即断即決、みんなを引っ張っていく才能があります。中小企業診断士として助言できることがないほどです。そんな社長にも貢献したいと思っています」

そして、岸本さんは「アイエンターを世界で一番楽しい会社にしていきたい」と語る。「楽しむ」は同社の経営理念にもある言葉だ。

「仕事をやらされていると思ったら楽しめない。仕事を楽しむための1つの手段として診断士資格があるのです。中小企業診断士は多様な知識を持っていて仕事を理解するときには必ず役に立つ。仕事を理解できるとやりがい生まれるし、お客様に提案もできるようになります。仕事を理解する人が増えればもっと良いものが作れるし、売上も上がると思っています。こうした考えについて後輩社員への指導や教育のため、開発部門に在籍時は勉強会を実施していました。今は忙しくてできませんが、日々の現場レベルでも一対一で伝えることはできます。たとえば飲み会の場で聞かれたら話すようにしています」

### 4. 企業内診断士として活躍するには

岸本さんは一時期、中小企業診断士として独立することを考えていたが、今では企業内診断士として活動を続けたいという。

「城西支部の外郭団体に加入し安定的に仕事を獲得できるようにするなど、独立準備を進めていました。総務グループに異動しても中小企業診断士としての価値を十分に発揮できないのではと考えていましたが、今では総務グループの仕事を楽しんでいます。」

また、総務グループでの業務で雇用保険の仕組みを知り、会社が守ってくれていることを実感しました。さらに、中小企業で働いているほうが手を挙げさえすれば多種多様なことにチャレンジできると気づきました」

筆者は、企業内診断士として活躍する第一歩として、まず現在の自分の担当業務を本当に理解しているか問うことが大切だと感じた。いつの間にかルーティンワークとなり、付加価値を生み出せない状態になっていないか、疑問を持つことが大切だ。

また、もっと貢献するにはどうすればよいか。その問いに答えるために、中小企業診断士の知識や経験が必ず役に立つはずである。企業内でまだまだできることがあるのでは、と気づく機会を逃さないことが重要だと取材を通して感じた。

#### 岸本 慎介

(きしもと しんすけ)

株式会社アイエンター管理本部総務担当。中小企業サポーター（診断、助言、支援）として、企業のIT化支援を中心とした活動も行う。2014年中小企業診断士登録。東京都中小企業診断士協会城西支部所属。



#### 伊原 知希

(いはら ともき)

同志社大学経済学部卒業後、システム開発会社で金融機関の基幹系システム更改案件に従事。現在は企画、要件定義段階の複数のプロジェクトを担当。2019年中小企業診断士登録。東京都中小企業診断士協会城東支部所属。

